PLAT CALENDAR

11 November

2［金］野村万作・野村萬斎 狂言公演 2018◉PLAT主ホール
3［土］―4［日］高校生と創る演劇『滅びの子らに星の祈りを～ Dystopia before Utopia ～』◉PLATアートスペース
4［日］十五周年記念 第五回 向日葵会 発表会「舞の道」◉PLAT主ホール
7［水］―9［金］第29回 クロマトグラフィー科学会議◉PLATアートスペース
9［金］―11［日］『ゲゲゲの先生へ』◉PLAT主ホール
10［土］中井貴惠の大人の絵本朗読会◉PLATアートスペース
11［日］深まる秋名曲と共に Vol.1 Autumn Concert◉PLATアートスペース
12［月］0才からのジャズコンサート◉PLATアートスペース
14［水］第66回 愛知県私学弁論大会◉PLAT主ホール・アートスペース
22［木］シリーズ古典遊学 西洋古典学び塾◉PLATアートスペース
23［金・祝］春風亭昇吉 独演会◉PLATアートスペース
24［土］林家正蔵 独演会◉PLAT主ホール
24［土］ドレミ～な♪ピアノ教室 発表会◉PLATアートスペース
25［日］ピティナ・ピアノステップ 豊橋11月25日地区◉PLATアートスペース
27［火］―29［木］豊橋演劇鑑賞会 第269回例会 こまつ座公演『マンザナ、わが町』◉PLAT主ホール

12 December

1［土］―2［日］PLAT小劇場シリーズ カンパニーデラシネラ『ドン・キホーテ』◉PLATアートスペース
2［日］民族舞踊団音舞 第45回定期公演◉PLAT主ホール
8［土］碓井雅史JAZZコンサート「Midnight in Montreal & Bar Vol.02」◉PLATアートスペース
9［日］ケルティック・クリスマス・コンサート◉PLAT主ホール
11［火］「南海トラフ地震を生き抜く知恵と備え」◉PLATアートスペース
12［水］はちまん正人「グロトリアンピアノ 魅惑のサウンドコンサートⅣ」◉PLATアートスペース
19［水］プラットワンコインコンサート Trio Glanz『音の三原色～四季を巡って～』◉PLATアートスペース
22［土］―23［日］ひとすじの会 第3回公演 群像劇『神野新田物語』◉PLAT主ホール
24［月・振］立川志の輔 独演会◉PLAT主ホール
27［木］フレスコの会 発表コンサート◉PLATアートスペース

表紙／「野村萬斎（悪太郎）」
撮影：政川慎治
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
平成30年10月発行 34号［隔月発行］

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2018年11月―12月
vol.34

TOYOHASHI ARTS THEATRE PLAT

プラットニュース

CONTENTS

表紙 野村萬斎 狂言「悪太郎」
2
INTERVIEW:1
野村万作・野村萬斎 狂言公演2018
狂言は、暖かさが必要なんです。
野村万作
4
INTERVIEW:2
高校生と創る演劇
「滅びの子らに星の祈りを
～Dystopia before Utopia～」
この世界は変えていける。
須貝 英
6
INTERVIEW:3
「ゲゲゲの先生へ」
大切にしたいのは、水木先生の人生観。
前川知大
8
INTERVIEW:4
林家正蔵 独演会
『ねずみ』他一席、語ります。
林家正蔵
10
PURA PURA
バラコの寄り道ぷらぷら
桑原裕子
今日のこの時間を絶対に
無駄にしちゃいけない
白井 晃
12
INFORMATION
PLAT主催公演情報
14
FOYER
カンパニーデラシネラ
「ドン・キホーテ」
「あーこういうのおもしろい」
というようなものを
ぜひ提示したい。
小野寺修二
15
SUPPORT
TICKET CENTER
16
PLAT CALENDAR

人間国宝・野村万作と現代劇や映画など幅広く活躍する野村萬斎が率いる「万作の会」による狂言公演。

狂言は、暖かさが必要なんです。

出演 **野村万作**

聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場PLATシニアプロデューサー

野村万作［のむら・まんさく］／1931年生。重要無形文化財各個認定保持者（人間国宝）、文化功労者。祖父・故初世野村萬斎及び父・故六世野村万蔵に師事。「万作の会」主宰。3歳で初舞台。早稲田大学文学部卒業。軽妙洒脱かつ緻密な表現のなかに深い情感を湛える、品格ある芸は、狂言の一つの頂点を感じさせる。日本芸術院賞、芸術祭大賞、紀伊国屋演劇賞、紫綬褒章、坪内逍遥大賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞、朝日賞、長谷川伸賞、旭日章受章ほか受賞多数。『法螺侍』『敦-山月記・名人伝-』等、狂言師として新たな試みにもしばしば取り組み、現在に至る狂言隆盛の礎を築く。練馬文化センター名誉館長。

中島── 万作さんと萬斎さんには、プラットができる前から豊橋には来ていただいております。これまでプラットニュースでは萬斎さんには何回か出ていただきました。今回はぜひ万作さんのお話を伺いたいと思い、お願いしました。

さて、今回は『萩大名』を演じてただくのですが、万作さんにとって、お好きな演目なのでしょうか。

野村── もちろん名作ですし、どの狂言師にお聞きになっても「好きだ」とおっしゃると思います。ことに私の父は大変好きで、すばらしかったです。

父は、「あの大名はバカな大名じゃないんだ」。「和歌についてモノを知らないだけ。そういうふうにやらなくちゃいけない」と言っていました。だから、あほうのやり方ではダメなわけです。そこに狂言らしい品格があった上で、物知らずという、人間誰にでもある短所をクローズアップしている大名なのです。モノを教える太郎冠者の方が利口に映る。しかし、太郎冠者はあきれ果てて先に帰ってしまう。歌が詠めない「面目もない」と、大名が茶屋の主人に頭を下げる。そしてトボトボと帰る。この味わいが暖かい。見る目というか、演ずる目というものは暖かさが必要なんですね、狂言は。僕みたいな歳になれば、暖かさ、優しさ、美しさ、そういうものを、ただエネルギッシュにやるのではなく、テクニックを見せるのではなく、もう一つ深いものを、観た方に感じて帰っていただくというか。その時だけワーッと笑って忘れるのではなく、その時は微笑むぐらいでも、「ああ、楽しかったな」というのがずっと残ってくださるとすばらしい。

中島── 以前、奈良の興福寺の野外で、雨の中、万作さんの『奈須与市語』の舞台を観させていただきました。

野村──『奈須与市語』というのは本当に名作です。繰り返し繰り返しやられる中で洗練されてきています。それを習って身につけているから、次のステップを踏むということに土台がきちんとあるわけです。そこが家に生まれ、子どものときからやっている人間のプラス面で、得な面です。

中島── あの張りのあるお声はどうやってお作りになるのですか。

野村── いや、もう声は出ません。もともとはキレイないい声だったのですが、ある年齢になった時に、そのいい声をぶっ壊そうと思った。いい声はすなわち薄い声だ、汚い声の方が深みがあると思ったのです。

つまり若さとか、よく言われたのですよ。それが嫌だった。そこから離れたい、もっと泥臭いものを身につけたい。子どもの時から父に十二分に習って教えてもらったから、技術的なモノは身についている。でも舞台は技術だけではないですから。そういうことがだんだんわかってくる。

中島──『釣狐』はあるお歳から装束を着けずに演じられるようになられたとお聞きしましたが。

野村── それは、歳を取ると、装束をつけては到底できないのです。面をつけて激しく動くと酸素不足になるでしょう。それだけでも大変なんです。面をつけなくても僕の歳では大変です。ただ、今までやってきた『釣狐』を今やるのなら、60代なり、いわんや30代、40代の頃にやっているのとは追求の仕方が違ってくる。この間ある取材で「太郎冠者の心で狐をやりたい」と言いました。太郎冠者は、狂言の役どころで一番多い人物です。庶民的な普通の人間で、長所も短所も持っている。狂言の王道というか、中心の道を歩いている役です。でも『釣狐』はテクニック万能の曲です。飛んだり跳ねたり。運動神経とシャープさと、代々伝わっている演技の様式。

これは、やはり厳しい訓練から身につくのですが、それプラス、あるいはそれを離れて新たに台本を読んでみたり、自分が袴でやったものを見てみたりで、だんだんに父から習ったものから離れていっている。狐が人間に化けている、その「人間」や、古狐だからその「古」をどう見せるか。年老いた狐の「年老いた」ところを見せたい。

中島── 装束についてお伺いしたいのですが、流派によって同じ演目でも柄が違ったりするのでしょうか。

野村── 取り合わせは原則的には演者（シテ）が考えるのですが、例えば袴と肩衣は、上下でいわゆる同系色でそろえることは避けて、あとは寸法のピッタリしているものを選んで。とはいっても、なかなか贅沢にすべてを持っているわけではありませんし、どんどん傷みます。お能は煌びやかな、絹の唐織などですが、ことに狂言は麻のものが多いから、ステージやなにかでこすったりすると特定のところが痛むわけです。長い袴なんか、引きずりますから、ことにそうです。

中島── 万作さんはお弟子さんに「美しい日本語を正確に」とお教えになっていると聞きしましたが。

野村── 弟子には、言葉の明確さをしょっちゅう注文を出しますね。この頃の方の発音の悪さは、大変気になっています。一般の方にも教えているのですが、同じ音が二つダブると、それをきちんと言えなくて、一字分に混ざってしまう。例えば「なになにした、たぶん」、と「た」が一つに混ざってしまって、きちんと言えないとか。あるいは、「しゃ」「しゅ」「しょ」がきちんと言えないで、「さ」「す」「そ」になってしまう。「ごひゃく」というのを「ごしゃく」と言う。「ひゃ」だよ「ひゃ」と、何度言っても直らない。謡に小さい「っ」が入ってくる言葉があった時に、その「っ」の分のリズムが消えている。例えば、「飛びかかり　かぶとを　おっとり」と言ったりすると、「かぶとを　おおとり」とかね。

中島── 豊橋では、『萩大名』『悪太郎』の他にも萬斎さんの解説もございます。ご来場頂くお客さまに一言いただけますでしょうか。

野村── フランクに自由に気楽に舞台に接していただくのが一番です。肩書に惑わされずに見てください。肩書なんてものは、見る基準にしてはいけませんよということですね。

中島── 素晴しいお話の数々、ありがとうございました。

撮影：政川慎治

野村万作 野村萬斎 狂言公演2018

11月2日［金］19:00開演
出演＝野村万作、野村萬斎ほか万作の会
会場＝PLAT主ホール
狂言「萩大名」、狂言「悪太郎」

INTERVIEW：1

INTERVIEW : 1

公募による高校生出演者とスタッフが、劇場やプロのスタッフとともに創造する演劇第5弾。

この世界は変えていける。

脚本・演出 **須貝 英**

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

矢作── 須貝さんの高校・大学時代はいかがでしたか。

須貝── 高校は進学校だったんですけど、成績がわりと良くて、学校をサボってもバンドや演劇に没頭しても特に何も言われなかった。かなり自由に過ごしていたと思います。小説家になりたくて、演劇部の友だちに「演劇には戯曲というものがある。小説と同じようなものだと思うから入ってみろ」と言われて入部したんですが、いつの間にか俳優をやらされていて。戯曲もその時に初めて書きました。

僕の出身地の隣町(山形県川西町)が井上ひさしさんのご出身地で、近隣の高校生はこまつ座さんの公演が安く観られたんですが、その時に観た『國語元年』や、ビデオで観たキャラメルボックスさんの『TRUTH』に凄く衝撃を受けました。田舎で何の情報もなかったので、早稲田大学に進学しないと演劇ができないと思っていて、それで早稲田大学に進学しました。たまたま選んだ演劇サークルが「てあとろ50'」で、入ってからキャラメルボックスさんを輩出したサークルと知り、不思議な縁を感じました。

矢作── プロとして演劇に進む決意はどのあたりで。

須貝── 大学を卒業する前は出版社に就職するか、美術史を学んでいたので学芸員になるか、俳優になるかという選択肢があった。その中から一番お金をもらって仕事にすることが想像できなかった俳優を選び、就職活動はしないと決めました。自分に向いていない気がするから、一生をかけて追求したいと思いました。卒業して約1年後に「箱庭円舞曲」という劇団に入ったのですが、一番最初にプロを意識したのはこの時期だったと思います。

箱庭円舞曲の作品は今でも好きで、主宰の古川貴義さんには大変お世話になったし、脚本・演出の師匠は誰かと聞かれたら間違いなく彼の名前を挙げます。それでも、もっとこうした方が良いとか僕だったらこう書くとか次第に思うようになって。俳優の目線で作品を作ってみたかった。25歳の時に1回きりのつもりで演劇ユニット「monophonic orchestra」を立ち上げました。今思えば旗揚げの作品は稚拙だったし、興行としても成功したとは言えなかったんですが、できなかったり悔しかったりした記憶を払拭したい思いで何回かやっていく内に、30歳前後で俳優と脚本家・演出家の比率が逆転し始めました。僕の年代の脚本家・演出家が少ないんだと気付いたんです。その時にプロとしてやっていけるかもしれないと確信しました。今は、脚本も演出も求められる限りはどんどんやろうと思っています。

矢作── 高校生たちの印象はいかがでしたか。

須貝── 丁寧に気を付けて、ケアしながら接しなければと思っていたんですが、一緒に色々とやっていく内にそういったことを忘れて楽しんでしまっていました。1人1人考えを持って、15年から17年くらいの月日を生きてきている。生き方の指針とか、持って生まれたものとか、自分の立ち位置とか、どうなりたいかとか、ちゃんと感じられるのが意外でした。

僕は人に会うのが好きで、その人の内側が見える瞬間が面白いなと思って色々探ってしまうので、隠されたり嘘をつかれたりするかなぁと思っていたんですが、案外そんなこともなく、それも嬉しかったです。実際どうかはまだ分かりませんけど(笑)。

矢作── 現時点の作品の構想をお聞かせください。

須貝── まず、自分がいつもやっていることをただやるのは避けたい。高校生がやるべきで、彼らもお客様も納得する作品を作ることがまず目標の1つかなと。そういう意味で等身大の彼らを描ければと思っています。ただ、演劇であるからにはお客様に非日常を感じてもらいたいし、自分以外の何かになれるのが俳優の醍醐味なので、演劇的な要素もちゃんと含んだ作品を作れれば面白いかなと考えています。

具体的には、今から300年後の高校生たちの話を書こうと思っています。あと70年ぐらいで地球が滅びてしまう。地球に残るか、それとも月や火星に移住するか。火星には特権階級か特殊な才能のある者しか行けない。月に行くには抽選がある。そういう世界です。彼らが高校生活の中で感じている劣等感や悩みや重圧、達成できないもの、おそらくいつの時代も、どの高校生もぶち当たるものを書きたい。同時にそれはどの年代にも通ずるものでもありたい。日常と非日常が劇場という繋ぎの空間で混ざり合った、高校生たちもお客様も体験したことがないものにしたいです。

矢作── 出演とスタッフで20人の高校生に、何を見て、感じてもらいたいと思っておられますか。

須貝── 彼らと触れ合って強く感じたのは、自信のなさと不安です。自分の存在が世界に影響を与えているのに気付いていない。僕が若い時も同じでしたけど、もっと虚勢を張っていたし、そうやって上の世代に認めてもらおうと思っていた。何の根拠もないのに「できます!」と言っていたあの頃の生意気さを思うと、諦める所からスタートする子たちがすごく多い。賢いというか、ある点では話しやすいんですが、それはそれで寂しい気持ちもあります。世界に関わって、変えていけることをもっと知ってほしい。

何もない舞台に俳優が1人出てくるだけで物語は生まれます。彼らがこの公演を経て日常の世界に戻った時に、10年後や20年後かもしれませんが、共演者やお客様の気持ちを動かした経験が自信に繋がれば、この世界をどんどん変えていける。僕は世界を少しでもいいから平和にしたくてお芝居をやっている。だから今回の企画に関われたことはすごくありがたくて。だって若い人が先々の世界を担っていきますから。とにかく、彼らのために物語を書いて、君たちには思う以上の存在感があるんだということをどんどん体感してもらいたい。

矢作── 最後に、豊橋の皆さんに一言ください。

須貝── 豊橋市にはこんな良い若い連中が居るぞということを是非知ってほしいです。今はそれを東京からやって来た地元民じゃない僕らだけが知っている状態で、モヤモヤしています。早くこの子らをお披露目したい。僕が最初に彼らと出会った印象を早く共有したい。先々の世界に対してがっかりしている人に、より見てほしい。世界は絶望するほど悪くないと思ってほしいです。

矢作── ありがとうございます。

須貝英[すがい・えい]／早稲田大学第一文学部美術史学科卒業。大学在学中より本格的に舞台活動を開始。在学中は演劇集団キャラメルボックスなどを輩出した劇団てあとろ50'に在籍。卒業後の2007年、シュールなリアリズムを作風とする<箱庭円舞曲>に所属。2013年退団。2010年2月には自身が脚本・演出を行うユニット、「monophonic orchestra」(モノフォニック・オーケストラ)を立ち上げる。俳優、脚本家、演出家の他にワークショップ講師としても活動中。近年では外部演出や脚本提供も精力的にこなす。北区王子小劇場の主催する佐藤佐吉賞にて2009年度最優秀主演男優賞を受賞。

11月3日[土・祝]13:00開演／18:00開演
4日[日]13:00開演／17:00開演
脚本・演出＝須貝英
出演＝オーディションで選ばれた高校生
会場＝PLATアートスペース

高校生と創る演劇

「滅びの子らに星の祈りを ~Dystopia before Utopia~」

INTERVIEW : 3

大切にしたいのは、水木先生の人生観。前川知大

脚本・演出

センス・オブ・ワンダーを描き続ける劇作家、イキウメの前川知大が、書き下ろしの新作を演出。個性豊かな実力派キャストで贈る。

聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場PLAT シニアプロデューサー

中島── イキウメの主宰者でもありますが、どういうことで始められたのですか。

前川── 元々、ホラー、SF、オカルトをやろうというのがあり、劇団名は生きたまま彼岸を超えるという意味にしています。

中島── そういう題材をおやりになったきっかけは。

前川── 今回取り組む水木しげる先生が入口でした。漫画ではなく妖怪の画集ですね。小学校にあがる前から、だいぶくたびれた感じの妖怪大百科日本編、世界編がうちにあった。あと、80年代に、UFOとかユリ・ゲラーとか、超能力だとかが流行ったのと、「あなたの知らない世界」とか。元々好きだったのですが、お芝居をと思ったとき、周りを見てもそういうモチーフで作っている人が、あまりいなかったので。

中島── イキウメを立ち上げるときは、大学のときの仲間ですか。

前川── 大学のとき、自主映画を撮っていたのですが、そのときに一緒にやっていた俳優たちが卒業して劇団を作って、その流れでです。

中島── 水木しげる先生のオマージュということですが、どのような捉え方が作品に反映しているのでしょうか。

前川── ご自分の人生観が行間から出ている人で。自伝もいろんなエッセイや漫画で書かれているのですが、それが一番セリフとして出ているのが、ねずみ男だったりする。評伝にはしたくなかったから具体的なエピソードは使っていませんが、自伝のセリフや振る舞いは反映しています。

中島── 片手だけで書いている、壮絶なイメージの割には、ユーモラスな部分がたくさんありますが。

前川── ユーモアは大事な要素だと思う。ただユーモアも、地獄を見たから出てくるユーモアで、楽しいだけじゃない。その裏には厳しい現実と、冷めた視点と、普通の人が想像できない人生経験からきている。なんとも言えない寂しさがある。だから今回の座組には、辛いこととか悲しいこともカラッと言える、そういうユーモアができる人を、というのはありました。

中島── 前川さんが描こうとしている妖怪は、どんなイメージでしょうか。

前川── 妖怪は自然の象徴でしかないという感じがします。コントロールできないという点では、自然もそうだし。人間の身体も、病気や老い、死も、絶対逆らえない部分としてある。

現れ方は人間の意志の反映というか、妖怪という種族が別にいて、僕らが発見してないジャングルの奥地に生きているという話じゃない。人間がいないと現れないという点では、鏡に映る姿と同じで、自分の内側にある問題や恐怖がそれを見せている。人間の外としての自然でもあるし、内側に抱えている自然が妖怪の根っこの部分と思います。

中島── プリミティブな、原始的な自然の驚異を体現することが最近はないなと思うのですが。

前川── 形を変えてあるんじゃないですか。「学校の怪談」とか。形を変えて続いている。子どもたちはきっと変わらないし、「妖怪ウォッチ」は、今の妖怪解釈だなと感じました。

昔の小豆洗いは、裏の川でサラサラサラサラ音がするのはきっと自然の音だろうが、夕方に、なんかシャリシャリシャリシャリ、「あれ誰かいるぞ」から生まれてきたと思う。夜道を歩いていると後ろからペタペタ音がする。それはその人の持っている、怖いという気持ちと何かの音が、誰かの足音に聞こえてくる。それはべとべとさんなんだということで、「べとべとさんか」と安心する。

妖怪ウォッチは、人間関係や個人的な悩みに苦しめられてストレスの原因になる事象を、妖怪のせいにすることで救われる。同じじゃないですか。妖怪は人間社会と未知のエリアの境界線で見るもの。田舎に行ったらあるが、都会ではない。その分、都会に現れる暗闇は人間関係にあり、そういうものに妖怪ウォッチは名前を付けていたのは、おもしろいと思った。

中島── 今回のキャスティングの中で初めての方は。

前川── 白石加世子さんと松雪泰子さんと水田航生くんと水上京香さんの4人かな。

中島── 女優さんは、どういったところでお選びに。

前川── 白石さんから、絶対妖怪でしょ、「かわいい妖怪にしてね」と言われました。松雪さんも、妖怪役。浮世離れしたあの美しさの上に、儚げな感じとか、ああいう居方は現世っぽくなくていいというのはありました。

中島── チラシのサイケデリックな、カラフルな衣装は意図的ですか。

前川── 僕のプロットを読んで、衣装さんのイメージでやってくれたはずです。僕はいいなと思いました。

中島── 佐々木蔵之介さんは、今回は初めての役どころですね。

前川── 企画の最初からねずみ男で、詐欺師役で。金に目がなくて、でもいつも失敗している役どころは、最初からイメージして、お願いしました。ひょろっとして、合うなと思うし。ご本人もおもしろがってくれました。

水木先生も、少年漫画で勧善懲悪なストーリーを書くのに抵抗があった。鬼太郎が正義の味方の主人公の話を書くのが嫌で。だからいちいちねずみ男につっこませる。いやいや現実こうだろと、問題解決して帰ろうとすると、鬼太郎に「謝礼もらわなきゃ、お前」みたいな、そういう茶化しで水木先生的にはバランスを取っていた。そう思うと妖怪だけど、人間に近いというか。半妖怪という設定です。

中島── タイトルにゲゲゲの次に「先生」と来ますが、「どういう内容ですか」とか聞かれるのですが。

前川── そのまんまです。ゲゲゲの先生は水木先生のこと。ほんとにオマージュというか、僕が思う水木先生の作品これですというか。多分この作品を見て、水木先生の作品を読むと、分かる。水木作品は、とっつきにくい。読みやすい漫画ではないと思う。そういう点では、分かりやすくエッセンスを伝えられると思います。

中島── 最後に、豊橋について、何かあれば。

前川── 2014年『暗いところからやってくる』のツアーでお世話になりました(前川脚本・小川絵梨子演出)。それ以来ですが、個人的にはバイクで京都とか行くときに通ったことは何度か。割と整然として、開けていてきれいだなっていう印象しかないんです。演出で来るのは初めてだし、まず知ってもらえたらいいかな。

中島── では豊橋でお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

前川知大[まえかわ・ともひろ]／劇作家、演出家。1974年生まれ、新潟県柏崎市出身。2003年結成の「イキウメ」を拠点に、脚本と演出を手掛ける。『散歩する侵略者』、『太陽』、『関数ドミノ』、『獣の柱』、『図書館的人生』他、目に見えないものの存在と人間との関わり、市民生活の裏側にある異界を、超常的な世界観で描く。2018年、『散歩する侵略者』『天の敵』で、イキウメが第52回紀伊國屋演劇賞団体賞を受賞。舞台を原作にした『太陽』(入江悠監督2016年)、『散歩する侵略者』(黒沢清監督2017年)など、映画化されている。

11月9日[金]19:00開演
10日[土]・11日[日]13:00開演
原案＝水木しげる
脚本・演出＝前川知大
出演＝佐々木蔵之介、松雪泰子、白石加代子ほか
会場＝PLAT主ホール

水木しげる作品への大胆なオマージュ

「ゲゲゲの先生へ」

INTERVIEW：4

『ねずみ』他一席、語ります。林家正蔵

「いい話、うぁ！良かった！」と、送り手をたくさんいただけるような高座を念頭に置いて

出演

——— 古典落語だけでなく幅広くご活躍ですが、頭の切り替えに秘訣などがおありですか。

正蔵—— 基本的に落語中心ですが、二つ目になった時にテレビのレポーターのお仕事をいただき、その後もアニメや舞台、映画、そのポイント、ポイントで、いろいろな方とのご縁が積み重なって、本日にきている。こんな仕事がやりたいとか、この名前を継ぎたいというアクションを起こさずとも、ご縁でね。ご縁をいただいたからには、一生懸命やらなくちゃと思うのは当たり前のことですが、ベースは噺家、落語、寄席に、地に足を付けてやっています。

——— 40歳を境にして、古典落語に正面から向き合いたくなったとお聞きしましたが。

正蔵—— 落語というのは基本、大人のものです。中学時代に志ん朝師匠の廓噺を聞いて、花魁も、太鼓持ちも、廓のこともわからないけれど、そこに素敵なにおいを感じたのです。話芸なり、語り口に魅力があれば、そんなことわからなくても、その世界に引きずり込まれてしまうのが、落語という芸。いわゆる、人間の魅力なのでしょうが、所帯を持ち、子どもがいて、弟子を持ち、若い人からお年寄りまでいろいろな人を見てきた中間点、40、50ね。ちょうど、折り返し地点に来た時に、「あ、これで、いろんな役ができる。」と思ったのです。その役といいましょうか、語りをやっている時に、登場人物の気持ちはどうだろうと、引き出しを開けた時に、その一つ一つのパーツが入っている。だから、40を境にとてもやりやすくなったのです。

——— 先輩たちの言葉からいろいろ学ぼうと、言葉帳を持っているそうですが。

正蔵—— それは秘密。皆さんもそうだと思うけど、ふっと何か心の真ん中にボーンっとぶつけられちゃう言葉を投げてくれる時がある。それをしっかり受け止めたいなと思う。僕の言葉帳のノートには、亡くなった柳家喜多八という、僕のすぐ上で修業した、うまさといったら当代随一という人もいるくらい素晴らしい噺家さんの、どうやれば落語家で全うできるかという言葉を書きとってある。言葉の稼業だから、人の言葉は大事にしていますが、薄っぺらいのは、つまんない。でも、厚すぎても重たく、うっとうしいな、なんて思っちゃいますな。

——— 師匠が思ういい噺家というのは、どのような噺家ですか。

正蔵—— それがね、ないんですよ。例えば、いい落語をやる。着物姿が似合う。高座の振る舞いがとても素敵。何となく良くなったという。でも、いい噺家って何だと言うと、これが見つからない。たぶん、誰も一生見つからないと思いますね。で、見つけよう見つけようと思っていないと上には上がれない。これでいいんだと思った時点で止まるだろうし、いいなと思うお師匠さんは、悩んで苦しんで、さらにその高みを覗いてみようと努力なさっている。

——— プレッシャーも多いと思うのですが、同じようなプレッシャーを抱えている方に、アドバイスになるようなことはありますでしょうか。

正蔵—— 父親は、父親。先代は、先代。別のものだと思っていただいた方がいいんじゃないですかね。もちろん、二代目、三代目であることで恩恵を被ることも、負のものをぶつけられることもある。それを考えずに、自分がどんな落語をやりたいんだ、いい落語をやるためにどれだけ稽古し、工夫し、自分の中にいいものをどれだけ取り込んでくるか。とにかく、好きでなきゃできないし、やっていけないし、落語が好きで好きでしょうがない。「嫌だ」なんて思ったことがない。辞めたいと思ったこともない。ありがたいなと思っている。

365日寄席は開いていて、来てくださったお客さまを前に、一席申し上げるなんて、こんな幸せな商売はない。親がどうだ、その倅だと悩んでいる方がいたんだったら、もし跡を継ぐにも、嫌だったら辞めた方がいい。好きだったら継いだ方がいい。親父よりも売れなかったとか、面白くない。いや、そうじゃない、自分は、自分の代のものを作ればいい。ということですかね。

——— 一人で高座に上がるのはとても恐ろしい気がするのですが、その時の気分はどのようなものなのでしょうか。

正蔵—— 先輩から理想の高座は「迎え手よりも送り手の方がいい芸をやりなさい」と言われた。「いい話、うぁ！良かった！」と、送り手をたくさんいただけるような高座を、まず念頭に置いています。それと、寄席以外のちょっと大きな小屋の高座の音響や明かりを設えている時に、客席側に回ると、ポツンと座布団が一つで、寂しいなと思います。でもね、プレッシャーは変わらないの。芝居の時も一緒なんですよ。落語は台詞を自分なりに変えても、自分がうけるのですから、いくらでもなる。芝居は、共演者の方に迷惑をかけない、とちりはしないとか。照明きっかけとか、この暗転台詞とかいうのがあるじゃないですか。だから、芝居も落語も、結局、面白いけど大変ということです。

——— 今回の題の『ねずみ』についてお話いただけないでしょうか。

正蔵—— 今回、豊橋公演には、江戸のお囃子で一番ねじめのいい、三味線の腕がいい、あさ師匠が来てくれます。生のお囃子を、楽しみにしてください。前座に、二つ目のたま平が上がって、で、私がやって、仲入りで弟子のつる子の一席の後、寄席の踊りをやる。その後私がもう一席たっぷりやります。

豊橋は、演劇、芸術、いろんなものに目の肥えたお客様がいらっしゃる。で、初めて正蔵を聞いていただくなら、甚五郎の『ねずみ』。もう一席は、まだその日にならないとわからない。それは、お客さんの雰囲気で決めようと思っています。

先ほど、落語は大人のものであるとは申しましたものの、今回の公演は、小学校高学年から、中学生ぐらいのお子さんでもわかるような内容のものになっています。落語をよく聞きこんだ方でも、逆に、笑点以外聞いたことないけど、ちょっと行ってみようかなんて思われた方も、ぜひ来てください。楽しめると思います。

林家正蔵［はやしや・しょうぞう］／1962年、東京都出身。78年、「林家こぶ平」として落語協会に所属。05年、九代林家正蔵襲名。国立花形演芸大賞古典落語金賞、浅草芸能大賞奨励賞、第70回文化庁芸術祭優秀賞等を受賞。落語協会副会長。落語のみならず、12年にNHK連続テレビ小説『梅ちゃん先生』の語りのほか山田洋二監督の手掛ける舞台・映画に多数出演。

11月24日［土］14:00開演
出演＝林家正蔵
会場＝PLAT主ホール

林家正蔵 独演会

2016年12月にKAKUTA『愚図』で俳優として登場した林家正蔵が、落語家としてプラットに登場！

今日のこの時間を絶対に無駄にしちゃいけない

PURA PURA バラコの寄り道ぷらぷら

KAAT神奈川芸術劇場芸術監督
白井晃

穂の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化アドバイザー
桑原裕子

桑原── 白井さんがKAATの芸術監督をお引き受けになるときに、芸術監督の仕事について劇場側からなにか具体的なリクエストはあったのですか。

白井── 無かったですね。「日本の公共劇場において、芸術監督という職域がまだ確立されないので、ぜひ芸術監督とは何かを一緒に考えていきましょう」と。それで、自分の使命について考え始めました。

桑原── KAATでどんな新作を発表するか、またどんなプログラムを組んでいくかは芸術監督をやるうえで決めておられたのですか。

白井── 私は今まで東京の劇場を中心に活動していた人間ですから、ここで年間何本か新作を作ることになったときに、目指したことは、「東京ではできないことをKAATではやってみたい」ということです。KAATのある横浜は東京から遠くもなく近くもなく非常に微妙な距離にあることが特徴のひとつで、電車では、渋谷、池袋と直結しています。要するに、東京から飛び出たおできみたいなところにあることを積極的に意味づけるには、東京ではできないことをここでやり続けることで、東京に対するカウンターとしておもしろい場所になればいいという考えがありました。そのために、芸術監督になって、まずKAATスタッフとプログラムを協議する会議を作りました。劇場のコアなスタッフと議論して、その中で私の演出する作品や、私の他にも演出していただくディレクターを決めていく、というように年間のプログラム作りに関わらせてもらっています。会議の中で、例えば僕が「うーん、違うんだよね」ということが、他のスタッフにとって「ぜひやってみたい」ということがあったり、逆に僕が「やりたい」と言っても、スタッフからは「白井さんそれはちょっと大変ですよ。」といわれることもあります。

桑原── KAATのプログラムが、毎回どんなアーティストとコラボレーションしているかを楽しみに見ています。ミュージシャンを呼ばれることが多いですが、それは意識的にされているのですか。

白井── ここにたくさんのアーティストに来てほしいと思っています。時々すごくワクワクする瞬間があって、今この瞬間KAATで事故でも起こったら、日本の演劇界が困るなというアーティストたちが劇場内に7、8人いるときがあるんですよ。KAATがそういうアーティストたちの根城になっていられたら嬉しいですね。

桑原── KAATは私からしたらもうかなり前からそういう場所にもうなっていると思うのですが。おもしろい人たちがこの劇場に集まっていて、「みんな横浜にいる」という気持ちになりました。

白井── 中にいると分からないものですね。僕にはもっとやりたい、つくりたいという思いがあります。KAATのスタッフは本当に大変かもしれませんが、僕はできるだけ多くの作品を届けたい。せっかくここには劇場という場と時間がある。公演をやっている日数、時間帯を増やしたいという、演劇人としての生理的な欲望があります。人が観てなきゃ演劇じゃない。稽古だけやっていたって演劇じゃない。それでいっぱい観てもらいたい、となるわけです。

桑原── 今後、芸術監督の任務は何年までと考えておられますか。

白井── 最初に頼まれた期間は5年。2020年までは僕が芸術監督の期間です。20年までに何ができるかで焦っているのですが、若い方々にどんどんKAATで活動していただきたいです。僕も37歳のときに『銀河鉄道の夜』を青山劇場で演出するチャンスをもらったのですが、初めは「こんな大きな劇場、僕には無理だ。」と思いました。やっぱり怖かったです。でもそのとき失敗したことや、経験したことが今に繋がっています。KAATは大きなホールもありますし、30代、40代の演出家たちに自分の任期中にどんどん使ってもらいたいですね。

桑原── 若い演劇人たちにはどうやったらKAATで作品を創る機会を得られるのでしょうか。

白井── こちらが若い才能を見つけるアンテナ張るのも大事ですが、やはりおもしろいものや現代をビビットに捉えて作品を作っていれば絶対目には止まるし、評判は聞こえてきますよ。そんな情報をちゃんとキャッチするのも公共劇場として義務だと思うのです。そういうシステムを作らなきゃいけないと思っています。年がら年中外で舞台公演を観るだけのスタッフを作ってもいいかもしれない。それを毎日毎日レポートしてくれる人がいてもいい。

桑原── 私は劇場に育てて頂いたという感覚があります。だから劇場で表現できる世界が広がっていく感覚を、若い演劇人たちに感じてほしいですね。白井さんは、KAATに立ちたい、使ってみたいという野望を思わせる芝居を、作ってらっしゃるなと感じています。私がPLATで活動させてもらうときにも、「あー PLATに立ってみたい、作ってみたい」と演劇人に思ってもらえるような作品を上演していきたいなと思います。

白井── 勇気をいただけるような言葉をありがとうございます。でも僕自身は、ほんとにできてない、できてないの繰り返しで。僕にもっと実力がなきゃダメだなと感じています。そして劇場というものが何かを触発されるものが見られる場所になっていくために、僕だけの力ではなく、いろんなアーティストの力を借りたくて、みなさんに集まってもらっているのです。

桑原── 私は高校のときから、白井さんのカンパニー遊◉機械全自動シアターを観ていまして、白井さんの頭の中に遊園地が何個あるのかなと思っていたんですよ。『オーマイパパ』という作品を見ていても。

白井── 特に、遊◉機械のときは「遊ぶ機械」を書いていましたからね。ほんとに遊園地に近いような感覚を。自分もそういうものが好きでしたし。でもちょっと最近はハードな方向になっていますかね。

桑原── でもこのあいだの『バリータック』にしても、私にとっては、もうワンダーランドですよ。目の前でファンタジックなことが次々と起きて。だから、憧れるし、私もすごく創作者としても参加したいなと思います。

白井── ぜひ一緒にやりましょう。桑原さんに来てもらって、何か作ってもらうことはイコール豊橋との連携もできることでもありますし。

桑原── ぜひ。何かKAATと一緒に。

白井── これからは公共劇場同士が連携していかないといけないと思っています。

桑原── 今、各地域でそういう空気が出ていますね。

白井── 各劇場がもっとオープンな関係になり、先頭で旗を振っている人たちが「一緒にやろうよ」と言うべきなんだよね。

桑原── そういう場所になっていくとすごいですよね。

まだまだしゃべりたいことだらけですけど、時間が来てしまいました。いつかPLATと一緒に繋がれるようなことも、ほんとにぜひぜひ。

白井── 今日お話ししたこの1時間を絶対に無駄にしちゃいけない、きっと何かやらなきゃいけないんですよ。

白井晃[しらい・あきら]／演出家、俳優。京都府出身。早稲田大学卒業後、1983-2002年、遊◉機械/全自動シアター主宰。劇団活動中よりその演出力が認められ、多くの演出作品を手がける。近年の演出作品に『バリータック』(18年)、『オーランドー』(17年)、『春のめざめ』(17年)など。受賞歴として、01、02年の演出活動にて第9回、第10回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。05年演出『偶然の音楽』にて平成17年度湯浅芳子賞(脚本部門)受賞。12年演出のまつもと市民オペラ『魔笛』にて第10回佐川吉男音楽賞受賞。16年4月、同劇場芸術監督に就任。18年10月『華氏451度』をプラットにて上演。

INFORMATION

PLAT主催公演情報

託児サービス対象公演
要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様¥500。お申込み、お問合せはプラットチケットセンターまで

マイセレクト4 対象公演

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター
◉劇場窓口・電話0532-39-3090［休館日を除く10:00－19:00］
◉オンラインhttp://toyohashi-at.jp［24時間受付・要事前登録］

U24・高校生以下割引ご案内 ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
◉料金＝U24［24歳以下対象］：公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下：一律1,000円
◉購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
◉その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

華氏451度

林家正蔵 独演会

東京フィルハーモニー交響楽団ニューイヤーコンサート

山下一史
©Ai Ueda

大谷康子
©Masashige Ogata

ダンス・レジデンス

工藤 聡

ダンス・レジデンス

Co. 山田うん

プラットワンコインコンサート

Trio Glanz［トリオ・グランツ］

10/27［土］・28［日］13:00開演　**好評発売中**
28日のみ
「華氏451度」
華氏451度――この温度で書物は燃える――。
思想管理のため本が忌むべき禁制品となった近未来、本の所持が発見されるとただちに焼却させることになっていた…。アメリカSF小説界きっての叙情詩人、レイ・ブラッドベリの傑作ディストピア小説が、白井晃と長塚圭史のタッグにより遂に初舞台化！●原作＝レイ・ブラッドベリ●演出＝白井晃●上演台本＝長塚圭史●出演＝吉沢悠、美波、堀部圭亮、粟野史浩、土井ケイト、草村礼子／吹越満●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席7,000円、A席5,000円、B席3,000円ほか

10/31［水］13:30開演／18:30開演
ミュージカル
「ナイン・テイルズ～九尾狐の物語～」上映会
●会場＝PLAT主ホール●料金＝無料（要整理券・要申込）●定員＝各回500名●対象＝どなたでも※小学生以下は保護者同伴●申込＝①プラットチケットセンター窓口（整理券）②オンライン（申込）

11/2［金］19:00開演
野村万作・野村萬斎　狂言公演2018
●出演＝野村万作、野村萬斎ほか万作の会●会場＝PLAT主ホール●前売予定枚数終了：当日券については10月中旬以降にお問い合わせ下さい。

11/3［土・祝］13:00開演／18:00開演　**好評発売中**
11/4［日］13:00開演／17:00開演
3日13:00のみ
高校生と創る演劇
「滅びの子らに星の祈りを～Dystopia before Utopia～」
●脚本・演出＝須貝英●出演＝オーディションで選ばれた高校生●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般2,000円、高校生以下500円ほか

11/9［金］19:00開演　**好評発売中**
11/10［土］・11［日］13:00開演
10日のみ
「ゲゲゲの先生へ」
●原作＝水木しげる●脚本・演出＝前川知大●出演＝佐々木蔵之介、松雪泰子、白石加代子ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］S席8,000円、A席7,000円、B席5,000円ほか

11/24［土］14:00開演　**好評発売中**
林家正蔵 独演会
●出演＝林家正蔵●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般2,800円ほか

12/1［土］・2［日］14:30開演
12月1日のみ
PLAT小劇場シリーズ
カンパニーデラシネラ
「ドン・キホーテ」
●原作：ミゲル・デ・セルバンテス●演出＝小野寺修二●出演＝大庭裕介、崎山莉奈、藤田桃子ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・日時指定・整理番号付］一般3,000円ほか

12/9［日］17:00開演　**好評発売中**
「ケルティック・クリスマス・コンサート～アイランド・ストーリーズ～」
神秘、郷愁、自然の香り、人の温もりを美しい旋律と楽しいリズムに乗せ、選りすぐりのアーティスト2組が贈る伝統のケルト音楽コンサート！●出演＝アルタン（バンド）、カトリオーナ&クリス（ハープ&ヴァイオリン）●料金＝［全席指定］一般5,000円、ユース2,500円●会場＝PLAT主ホール

12/24［月・振］13:30開演
立川志の輔 独演会
古典・新作を問わず落語に新しい息吹を吹き込む、大人気の立川志の輔による独演会。●出演＝立川志の輔●前売予定枚数終了：当日券については12月以降にお問い合わせ下さい。●会場＝PLAT主ホール

2019/1/19［土］16:00開演　**好評発売中**
ライフポートとよはし
「東京フィルハーモニー交響楽団 ニューイヤーコンサート～オール・チャイコフスキー・プログラム～」
愛知県出身の人気・実力ともに日本を代表するヴァイオリニスト大谷康子をソリストに迎え、フィギュアスケートなどでもお馴染みのチャイコフスキーの楽曲をお届けします。新年を華やかに彩るオーケストラの調べをお楽しみください。●指揮＝山下一史●ヴァイオリン＝大谷康子●管弦楽＝東京フィルハーモニー交響楽団●会場＝ライフポートとよはし コンサートホール●料金＝［全席指定］S席4,500円、A席3,000円ほか

2019/2/15［金］19:00開演・**16［土］**14:30開演
PLAT小劇場シリーズ
木ノ下歌舞伎
「糸井版 摂州合邦辻」
現代における歌舞伎演目上演の可能性を発信する木ノ下歌舞伎が『摂州合邦辻』を読み解き直し、現代に紡ぎ出します。市民と創造する演劇でもタッグを組んだ木ノ下裕一と糸井幸之介による新作です。●会員先行＝11月10日（土）●一般＝11月24日（土）●作：菅専助、若竹笛躬●監修・補綴：木ノ下裕一●上演台本：糸井幸之介、木ノ下裕一●演出・音楽：糸井幸之介●出演＝内田慈、田川隼嗣、土居志央梨、大石将弘、金子岳憲、伊東沙保、西田夏奈子、武谷公雄ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝［全席指定］一般3,000円ほか

「滅びの子らに星の祈りを」

2019/3/16［土］・17［日］14:30開演
PLAT小劇場シリーズ
MONO
「正しいけど嫌い（仮）」
笑って、その後少しもの哀しい巧みな会話劇を真骨頂とするMONOがPLATに初登場。30周年を迎える2019年は、新メンバーを加え、装いも新たに「MONOらしい」お芝居をお届けします。●会員先行＝12月1日（土）●一般＝12月15日（土）●作・演出＝土田英生●出演＝水沼健、奥村泰彦、尾方宣久、金替康博、土田英生ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席指定］一般3,000円ほか

11/18［日］14:00開演
ワークショップファシリテーター養成講座2018後期
「まちに聞く、考える」発表会
受講生がまちあるきをして見つけたエピソードや体験を、短い演劇にして上演します。劇場の中に広がる小さな豊橋をご覧ください。●出演＝ワークショップファシリテーター養成講座［後期］受講生●監修＝すずきてーた、青山公美嘉ほか●会場＝PLAT創造活動室A●料金＝無料●定員＝40名程度（申込順）●申込＝①プラットチケットセンター（電話0532-39-3090）②オンライン

アートによる魅力発信事業　豊橋アーティスト・イン・レジデンス2018
ダンス・レジデンス
国内外で活躍するアーティストに新しい作品創造のための稽古場と滞在場所を提供し、アーティストへの育成・支援をおこなうとともに、アーティストによるワークショップ・試演会等を開催し、市民のダンス活動の活性化を図るプログラムです。
11/26［月］～12/8［土］ 工藤 聡
公開企画①ダンスワークショップ「モーション・クオリアによる身体表現」
●12/1［土］17:00～19:00
●会場＝PLAT●参加費＝1,000円●対象＝高校生以上で演劇・舞踊の経験がある方●募集＝20名程度11月16日（金）17:00まで（書類選考あり）●申込＝①オンライン②窓口・FAX／参加申込書を提出
公開企画②稽古場公開
●12/2［日］16:00～18:00
●会場＝PLAT※無料・申込不要／出入り自由
公開企画③成果報告会（作品試演&トーク）
●12/8［土］16:00～17:00
●会場＝PLAT※無料・申込不要

12/10［月］～12/16［日］ Co.山田うん
公開企画①ダンスワークショップ「踊るよろこびと新しい身体に出会う」
●12/12［水］19:00～21:00
●会場＝PLAT●参加費＝500円●対象＝中学生以上で健康な方●募集＝20名程度（先着順）●申込＝①オンライン②窓口・FAX／参加申込書を提出
公開企画②稽古場公開
●12/13［木］14:00～18:00
●会場＝PLAT※無料・申込不要／出入り自由
公開企画③成果報告会（作品試演&トーク）
●12/15［土］19:00～20:00
●会場＝PLAT※無料・申込不要

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート
「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。500円で贅沢なひとときをお過ごしください。●会場＝PLATアートスペース●料金＝［全席自由・整理番号付］500円
12/19［水］14:00開演「音の三原色～四季を巡って～」**好評発売中**
Trio Glanz［トリオ・グランツ］野本淳之亮（クラリネット）、黒川真洋（チェロ）、山下響（ピアノ）
2019/1/5［土］14:00開演「感じる、フルートの魅力」　**好評発売中**
河合雪子（フルート）
2019/2/6［水］14:00開演「カルテットの調べ～ドイツ音楽にのせて～」
●会員・一般同時発売12月19日（水）
Le Bois Quartet［ル・ボワ・カルテット］
宇佐見優（ヴァイオリン）、金谷寧々（ヴァイオリン）、山内佑太（ヴィオラ）、兵藤雅晃（チェロ）
2019/3/29［金］11:30開演「イタリア音楽の調べ」
●会員・一般同時発売12月19日（水）
松本純奈（オーボエ）

シリーズ『古典遊学』
西洋古典学び塾
●講師＝鵜山仁●参加費＝500円
11/18［日］17:00～20:00
「シェイクスピア戯曲」
●募集人数＝50名（申込順）●会場＝PLAT研修室（大）
11/22［木］18:30～20:00
「ギリシャ悲劇」
●募集人数＝100名（申込順）●会場＝PLATアートスペース

ワークショップ
11/29［木］19:00～21:00
カンパニーデラシネラ『ドン・キホーテ』関連企画
小野寺修二　身体ワークショップ「相手を見る、からだを知る」
●講師：小野寺修二（演出家）、藤田桃子（俳優）●参加費：1,000円●対象：健康で身体を動かすことが好きな高校生以上●募集人数：20名程度（応募多数の場合は選考）●締切：11月12日［月］17:00必着●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより
12/14［金］18:30～21:30
12/15［土］13:30～18:00 ※17:00より発表
市民と創造する演劇『リア王（仮）』関連企画
樋口ミユ　演劇ワークショップ「記憶で創る二日間の演劇創作」
●講師：樋口ミユ、岸本昌也●参加費：1,000円●対象：高校生以上、40歳以下の演劇経験者●募集人数：10名程度（応募多数の場合は選考）●締切：11月26日［月］17:00必着●申込方法＝①参加申込書を窓口、FAXにて提出②劇場ホームページの専用申込フォームより

カンパニーデラシネラが手掛ける、大人も子どもも楽しめる古典名作劇場第二弾。

PLAT小劇場シリーズ
カンパニーデラシネラ

「ドン・キホーテ」

12月1日[土]・2日[日]14:30開演
原作＝ミゲル・デ・セルバンテス
演出＝小野寺修二／テキスト＝山口茜／美術＝石黒猛
出演＝大庭裕介、崎山莉奈、雫境、
鉾久奈緒美(大駱駝艦)、伊吹卓光、藤田桃子
会場＝PLATアートスペース

FOYER

小野寺修二[おのでら・しゅうじ]／演出家。カンパニーデラシネラ主宰。日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。95年〜06年、パフォーマンスシアター水と油にて活動。その後文化庁新進芸術家海外留学制度研修員として1年間フランスに滞在。帰国後、カンパニーデラシネラを立ち上げる。マイムの動きをベースに台詞を取り入れた独自の演出で世代を超えて注目を集めている。第3回日本ダンスフォーラム賞受賞。第18回読売演劇大賞最優秀スタッフ賞受賞。近年の主な演出作品は『あの大鴉、さえも』『オフェリアと影の一座』『ロミオとジュリエット』(以上、2016年/東京芸術劇場他)、『変身』(2017年/静岡県舞台芸術センター)、『ふしぎの国のアリス』(2017年/新国立劇場)等。また、瀬戸内国際芸術祭2013にて、野外劇『人魚姫』を発表するなど、劇場内にとどまらないパフォーマンスにも積極的に取組んでいる。2015年度文化庁文化交流使。

「あーこういうのおもしろい」というようなものをぜひ提示したい。

演出 小野寺修二

――――豊橋の印象はいかがでしたか。

小野寺―こんなにお芝居に興味ある人がいるんだなというのが実感で、鑑賞機会と参加機会の両輪が充実して続いているように感じられ、市民と劇場と景観が少しずつ近づいていると思います。

劇場としてもすごく使いやすい。僕らが前回上演させて頂いたアートスペースはその名前の通り、こんなこと、あんなことがと出来る場所で、大きさも良く、豊橋公演ならではのものになりました。外から、上からと、いろんな場所を借景して使い、可能性を感じるスペースでした。

買い取りの公演となると、どうしても効率よく2、3日来てとなるけれど、豊橋は劇場に合わせる形でのリニューアルの時間をいただけて、作り手からすると大変うれしいです。クリエイションについて、その場でうまれるものについて、共有頂けている気がします。

――――市民劇で、小野寺さんのステージングがすごく特徴があったのですが。

小野寺―参加者は高校生から70歳近い方まで年齢の幅があり、良い意味でバラバラでした。昼間は学校や仕事があってその後集まる中で、お芝居をやりたいと本気な方もいる。何か文化的な活動に参加してみたいという方もいる。モチベーションの持ち方について正解があるわけではなく、皆で一つのものを作ることについて考えましたね。ただ、体を動かしてみると不思議なもので、だんだん各々の興味が見えてくる。この振り覚えてとかより、最初身体ワークショップから始め、皆一緒になって考えを持ち寄り形にしていきました。皆さんエネルギーがあって、おもしろかったです。

――――皆さんを生き生きと動かされるやり方にすごく特徴がありますね。

小野寺―そんなに特別なことはしてなくて。自分がやってきたパントマイムの特徴なのですが、日常の動作の延長なので、やりたいことがイメージとして比較的共有しやすいのかもしれない。

――――『ドン・キホーテ』のどういうところに興味を持たれたのですか。

小野寺―『ドン・キホーテ』は400年以上前に書かれた随分昔の話です。そこで、ただの遠い話として終わってしまうか、今現在観ている人が当事者として観られるよう着地できるかで、大きな違いがあると思っています。そして人間が興味を持つことや喜ぶことは、時代が変わってもそんなに違わないかもしれない。400年読みつがれることにヒントがあって、普遍性をつかまえることを意識しています。

『ドン・キホーテ』自体は、主人公がどこまで本気で正気なのか原作を読んだところ伺いしれず、そこが演出的な腕のふるいどころであり人々に愛されてきた所以と思うのですが、でも悲劇という構造はずらしちゃダメで。それを喜劇にしたり、分かりやすくするのではなく、こんな悲しい話だけど自分自身は幸せだとずっと信じていたということで、意味があったと、肯定する気持ちはすごい戦いなんだ、と。バカだなと上から見るか、自分もドン・キホーテだと思えるかで全然スタンスが違う。自分を信じて風車に向かっていこうみたいな気持ちでいけばいい。

――――メインターゲットは必ずしも子どもではないのですか。

小野寺―まず視覚的な要素として人の身体と、もう一つ何か「あーこういうのおもしろい」というものを提示したくて、美術の石黒さんにお願いしています。発明家なので、不思議なオブジェをいっぱい作ってくれる。今回もちっちゃな馬とか、サイズは馬だけどなぜか頭部だけとか、動く箱とか。そういう遊び心を伝えたい。しゃちほこ張って見るのではなく、ものすごく近い距離で人が本気で動いていたり、大きな声だったり、一生懸命見ないと見えないものがあったり、急に暗くなったりとか、初めて劇場に来たという人たちにもう1回来てみたいと思ってもらいたいと思っています。

今作は去年高知県で作って、小中学校でも鑑賞してもらい、今回劇場用に再演しようという企画で、最初は夢中におもちゃを使って、楽しい『ドン・キホーテ』を作ったのですが、今現在やる意味を改めて考えると、意外に身につまされるものがありました。主人公のキャラクターでもある、他人に理解されず笑われても続けるのか、勘違いして生きていくことは幸せなのかとか、思い入れが少し変わってきた。子どもたちに、お芝居っておもしろいと思ってもらいたいと同時に、劇場で一般の大人の方に見てもらいたいなと思った。

子どものためにとは意識せず、年齢というよりは、あまり芝居を観たことがない人にも楽しんでもらいたいというイメージで。60歳でも、1回も劇場に来たことがない人もいるかもしれないし、そういう方を意識しています。

でも、子どもに観てもらうって不思議なもので、小学一年生と中学三年生だと興味を持つシーン自体違うかもしれない。それを役者の人たちが感じ取れると良いなと。1年生は、難しい言葉出てくると途端に興味を失って、そこにある花びらを取って投げたりしているし、役者としての真価が問われる。大人はつまらなくても見ててくれるのだなあと。子どもの前に立つことはカンパニーの成長としても、有り難い機会だと思っています。

――――いろいろ刺激を受けるお話を伺えました、ありがとうございました。

小野寺―ありがとうございます。頑張りますホントに。

協力:フリーペーパーMEG　提供:高知県立美術館／撮影:釣井泰輔

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役　竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代)Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

Gallery 48 呉服町48 TEL.54-4848

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科　婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23　豊橋 竹内産婦人科 検索Q

ケンチク クロノ
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町160-9　障害年金専門社会保険労務士　竹下英司

看板広告　アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16　電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック　院長 大島 毅
東田町井原39の7(市電赤岩口終点前)　電話62-5511(代)

ONOCOM 株式会社 オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院　伊藤之一　伊藤文二
豊橋市小池町字原下35　電話45-5283(代)

創業文政年間 きく宗
豊橋市新本町40　電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2　TEL53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行　みずほ銀行　静岡銀行　名古屋銀行
三井住友銀行　三井住友信託銀行　清水銀行　第三銀行
十六銀行　愛知銀行　中京銀行　大垣共立銀行

御茶庫菓子専門店
若松園
御菓子司　創業江戸

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259(小川恵司)

安心・安全な地下駐車場
パーク500
ソノの親子の看板が目印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌　院長 塩之谷 香　副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54　電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 ちくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間　月・火・木・金 10:00〜13:00 16:00〜19:00
土 10:00〜14:00　休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久　豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店 高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本の豊川堂
本店・カルミア店・アピタ向山店・プリオ豊川店
セントファーレ田原店・ささしまグローバルゲート店

植物専家 ねりや花でん
ココラフロント　ホテルアークリッシュ1F

ISO9001　ISO14001　愛知ブランド企業　認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 ／ 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ

プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090[休館日を除く10:00−19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp[24時間受付・要事前登録]

プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、
若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]：公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下：一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810[代表]
開館＝9:00−22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT